

<論文>

テレビ・ニュースにおける字幕：制作サイドの視点からの考察

Subtitles in Broadcast News: Perspective from the Broadcast News Production Side

稲生 衣代

Kinuyo Ino

(青山学院大学)

(Aoyama Gakuin University)

Abstract

When translating for broadcast news in Japanese television stations, the producers of news programs decide on which style of translation is appropriate for the material to be broadcast. In breaking news and in live events, simultaneous interpreting is often used, but in most other cases, subtitles provide the dominant alternative. This article first explores the transition process from simultaneous interpreting to subtitling in the broadcast news of scientific events followed by the analyses of the subtitling process within the Japanese broadcast media from the perspective of the news production side.

1. 分析視角

2016年の米国大統領選を控えて現在指名候補争いが行われているが、ドナルド・トランプ氏の存在感は抜きん出ている。発言で物議をかもしながら支持率は高い水準を保ち、政治アナリストの予想を覆す展開が見られている(本稿執筆時の2016年2月半ば現在)。そのトランプ氏の発言を日本の報道番組で伝える際には、字幕が多用されている。

Diaz-Cintas & Orero (2010)によれば、AVT(視聴覚翻訳)はリボイシングと字幕の2種類に分けられ、リボイシングの中には、「吹き替え」と「ボイスオーバー」が含まれるとされる。Pedersen (2011)は、複数あるAVTの訳出形態のうちいずれが選択されるかについて、欧州を例に主に経済性、媒体、政治、ジャンル、伝統の5つの要因を挙げている。たとえば、吹き替えと比較し、一般に字幕の作成コストは低くなるため、限られた予算の中では字幕を選択することが考えられる。あるいは伝統的に字幕が優勢であった国では字幕が多用されるとする。このように、訳出形態の選択には複数の要因が絡み合っている。

こうした複数ある訳出形態のなかで字幕の特徴は何か。Gottlieb (2004)は、字幕はオリジナル音声流れる中、映像に加えられるため、比較が容易になり、リボイシングに比して誤りが指摘されやすいとする。また、Hatim & Mason (1997)は字幕には「字数や行数制限などの表現媒体・チ

チャンネルの制約」、「オリジナルと比べ圧縮された内容になる」、「映像情報と字幕情報という異種記号間の結束性が要求される」といった制約があると指摘している。制約があるものの、字幕処理により、「表情のみならず、言語以上に多くが物語られている可能性がある発話時の音声的特徴などの非言語的要素を観察することが容易になる。かかる処理方法は、どのようなメッセージを発信しようとしているのかについて、受け手が理解しやすい」(稲生 2013)という利点がある。つまり、字幕には制約はありながらも、たしかに優位性もあるのだ。

以上のように、先行研究では視聴覚翻訳の類型化と訳出形態の選択方法を検討しつつ、字幕の特徴について分析がおこなわれてきた。ただ、Karamitroglou (2000)でみられるように字幕と吹き替え間の選択と比較に関する先行研究は多いが、字幕と同時通訳を取り上げた研究は管見の限りではみられない。

他方で、ニュース翻訳について Valdeón (2015) は、ジャーナリスティック・トランスレーション (JTR) は翻訳研究のサブ領域として確立され、テレビ・ニュース制作における翻訳の役割も注目を集めていると指摘しているが、マルチモード・テキストの複雑性のために分析が難しいと論じている。Valdeón は JTR の分析方法として、ニュース翻訳研究に関して言語学的アプローチをとる "Product-based research: textual/discursive approaches"、キーストロックやアイトラッキングなどのプロセスに焦点を合わせた "process-based approaches"、翻訳プロセスの文化的側面に着目する "cultural studies approach"、受け止め方を調べる "reception studies"、報道機関に焦点を合わせた "medium-based studies" からのアプローチが可能だと述べている。

また Holland(2013)は、翻訳テキストに焦点を合わせた "product-oriented approach"、あるいは翻訳が実際、誰により、どのようなコンテキストの中で作成されているのかを中心とした "process-oriented approach"をとることが可能だとしている。

以上の先行研究の指摘をふまえ、本稿ではニュースにおける翻訳、とくに字幕作成に対象を絞り、Valdeón の第5のアプローチ(焦点を報道機関におくアプローチ)と、Holland の第2のアプローチ(プロセス本位のアプローチ)を併せた複合的アプローチを採用する。

そこでリサーチクエスションは、「(1)報道機関で番組を制作する側が、どのような基準で字幕を選択し、(2)いかなる過程で字幕を作成しているのか」ということになる。

具体的には、番組制作者がニュース番組の制作にあたり字幕と同時通訳という異なる訳出形態をどのように使い分けているのかを考察する。この考察においては 2 章において過去の重要な科学イベントの例をもとに、時系列で分析を行う。次に 3 章では、どのような背景や基準で字幕を選択するのか、そしてどのようなプロセスで字幕を作成しているのかを分析する。技術開発が字幕作成に及ぼす影響にも論及する。ここでは、番組制作者へのインタビューをもとに検討する。

2. ニュースにおける翻訳一字幕・同時通訳の選択と関係性

2.1 同時通訳と字幕の選択

海外からの外国語のニュースや外国語が含まれる現地中継を導入して番組制作を行う場合、

同時通訳、ボイスオーバー、字幕がつけられることが多い。これらの訳出形態の選択の基準あるいは相互に関係性がみられるのかが、本稿の第一の問題意識である。

時間の流れでみた場合、海外で重要な事件やイベントが発生した場合、国内のテレビ放送事業者は、まずは視聴者に向けた速報性を重んじるだろう。すなわち、即時に訳出が可能な「同時通訳」が選択されることが予想される。なお、重要な事件やイベントが発生した直後にはボイスオーバーを利用することはまれであるため、以下の考察ではボイスオーバーについては触れないこととする。

他方、一定時間が経過すると、事実をより正確かつ平易に伝えることが重要になると考えられる。この場合には、同時通訳では脱落や省略、翻訳シフト、時間的ずれが生じやすいため、「字幕」が利用され、それ以後の放送においては字幕付きのニュースが反復されていくものと予想される。

なお、ここでいう「一定時間」とは、あくまで重要イベント発生後の一定程度連続した時間的範囲内を意味している。重要イベントが終息し、さらに時を経た後、当該イベントへの評価も含めて総括的に制作される特別番組のようなケースは含まない。

以上の考察から、ニュースの翻訳においては「同時通訳→字幕」という流れが最も自然であるものと考えられる。

そこで、次節では、得られた「同時通訳→字幕」の流れが実際のニュース番組の事例で確認できるか検討してみたい。

2.2 ケーススタディによる同時通訳と字幕の関係性の確認

ここでは重要な科学イベントのニュースを取り上げる。科学イベントを分析対象としたのは、同時通訳が放送で重要な役割を果たした事例のひとつが科学イベントであったためである。その代表的な例として、1969年のアポロ11号の月面着陸をあげることができる。本稿では、第1にスペースシャトルのディスカバリー号の打ち上げ、第2にスペースシャトルのコロンビア号の事故、第3にスペースシャトル打ち上げの延期、第4にノーベル賞発表の4つのニュースを取り上げる。

手順としてはNHK番組アーカイブスにおいて、スペースシャトル関連ニュースのうち、通訳がつけられているものを検索し抽出した後、報道が反復されていたことから分析可能となる事例を抽出した。ノーベル賞については、論文執筆時にできるだけ近い時点における動向を検証するため、スペースシャトルと同様な条件に当てはまる科学関連のニュースを取り上げた。なお、ノーベル賞については、NHK番組アーカイブスから得た情報ではなく、筆者自身の録画記録に基づいて分析を行った。

また、放送時期は、原則としてイベントの発生日から12時間程度の範囲までを取り上げる(但し時間的スパンには事例の内容により差異がありうる)。

以下、イベントごとに論じる。ここで取り上げるニュースは全てNHK総合テレビのものである。

2.2.1 スペースシャトル打ち上げ(図1(1)①参照)

1998年10月30日午前3時45分から1時間15分、NHKでは定時ニュース以外に枠が設け

られた「特設ニュース」として、「スペースシャトル・ディスカバリーまもなく打ち上げ」が放送された。向井千秋氏が日本人として初めて二度目の宇宙飛行に挑戦し、なおかつジョン・グレン氏が史上最高齢の77歳で36年ぶりに乗り込むということで、注目され、連日この関連ニュースが伝えられていた。この特設ニュースでは、専門家と解説員を迎えたスタジオ、記者の現地報告、NASA の中継と、3 か所から交互に伝えるスタイルがとられた。目的は打ち上げの瞬間をリアルタイムで視聴者へ伝えることであり、NASA の打ち上げの中継をリアルタイムで放送する訳出形態として同時通訳が使用された(なお、スペースシャトル報道の流れについては稲生(2013)を参照のこと)。

朝のニュース番組では特設ニュースの際の同時通訳がそのまま使用され、字幕使用が始まったのが、午前10時台からであり、グレン氏の交信内容に字幕がつけられていた。続いて正午のニュースでも字幕が使用され、時間の経過とともにオリジナル音声を活用しつつ字幕を使用する例が増えた。

午後7時のニュースの冒頭では、「ディスカバリー発射です。6人のクルーを乗せています。そしてアメリカ人のレジェンドを乗せています。伝説的な宇宙飛行士です」といった特設ニュースの同時通訳がそのままの形で使用されていた。7時3分過ぎには、同時通訳がつけられていた同じ映像に以下の2行の日本語字幕がつけられていた。

「6人の飛行士と1人の伝説的人物を乗せ
ディスカバリーが飛びたちました」

このニュース番組では他に飛行士の交信や大統領の発言がすべて字幕処理されていた。

2.2.2 コロンビアの事故(図1(1)②参照)

スペースシャトル・コロンビアの事故の第一報は、2003年2月2日午前0時のニュースで5分間伝えられた。その後、別の番組の放送が始まったが、0時15分に「番組の途中ですが、ここでニュースをお伝えします」と再び、スペースシャトルの事故のニュースに戻った。番組は、米国ABC系列局の映像を使用したり、スタジオでのアナウンサーと現地に詰める記者とのやりとりや、電話インタビューなどを交えながら進行した。

0時28分からは、ABCニュースを同時通訳で伝えるようになった。その後も特別報道体制は続き、3時21分過ぎになって、ケネディ宇宙センターで行われたNASAの会見の様子が、同時通訳で伝えられた。

その後、番組が進行するなかで、NASA 会見の様子を同時通訳がつけられた形で何度も放送された。コロンビアは連絡が途絶えてから空中分解し、墜落したもようであると伝えられていたが、4時頃に、コロンビアが墜落し、乗組員全員が死亡したことが明らかになった。4時5分頃に、その時間すでに始まっていたブッシュ大統領の会見に切り替わり、同時通訳で伝えられた。5時からのニュースでも引き続き、事故報道が続き、付近の住民の証言などは字幕で、ブッシュ大統領とNASA 長官の発言は同時通訳がつけられた形で伝えられていた。

その後も断続的に事故に関する報道が行われ、正午のニュースで、ブッシュ大統領や NASA の会見に英語音声聞かせながら字幕で伝える形態で放送されるようになった。

2.2.3 スペースシャトル打ち上げ延期(図1(1)③参照)

2003 年のコロンビアの事故以来の打ち上げとなるため注目を集めたスペースシャトル・ディスカバリーの打ち上げは、予定の 2005 年 7 月 14 日には実施されなかった。午前 6 時台のニュース番組では、センサーに異常が見つかったため、延期が決定された旨が同時通訳で伝えられた。その約 1 時間後の 7 時台のニュース番組では、同じ内容の情報が、視聴者にとって視認しやすい日本語字幕で伝えられた。

打ち上げは 7 月 26 日に実施され、午後 11 時半から始まったニュース番組の中で、11 時 37 分過ぎから NASA の実況を同時通訳の訳出形態を使用して伝えられた。スタジオでのキャスターとゲストとのやりとりと組み合わせつつ、外部燃料タンク分離などの実況を同時通訳で伝えていた。続く午前 0 時からの番組では、打ち上げ成功のニュースが、前の時間の同時通訳をそのまま再度利用する形で伝えられていた。

2.2.4 ノーベル賞(図1(2)参照)

2015 年 10 月 5 日にノーベル生理学・医学賞の発表があったが、午後 6 時 34 分 NHK ニュース「首都圏ネットワーク」放送時に速報として、他のニュースを伝えている二人のキャスターの上の部分に以下の 2 行のテロップ^{註1}が表示された。

「ノーベル医学・生理学賞に
北里大学名誉教授 大村智さん」

6 時 36 分にはノーベル委員会による発表の映像が同時通訳付きで流れ、しばらく別のニュースに戻った後、6 時 43 分に再度ノーベル賞ニュースに戻った。その際、同時通訳者の名前が表示された状態で、「2015 年ノーベル医学・生理学賞が決定いたしました。共同受賞です。ウイリアム・C・キャンベル、サトシ、大村智さんです。大村智さん。1935 年日本生まれです。北里研究所の名誉教授でいらっしゃいます」と通訳されていた。続いて、「NHK ニュース7」では、トップニュースとして扱われ、先ほどの同時通訳を使用した後に、別の通訳者による、研究内容についての発表部分の同時通訳が使用されていた。その同時通訳は「寄生虫による疾患は人間に対して、これまでずっと私たちに苦しめてきました。そして多くの、何億人ものもつとも弱い立場にある市民たちが苦しめられてきました。ウイリアム・キャンベル氏の発見と、また大村智の発見によって、私たちは革命的な治療にたどり着くことができました」というものであった。7 時のニュースの終わりにも、発表の瞬間を伝える同時通訳が再度利用されていた。

続いて午後 9 時放送の「ニュースウォッチ 9」では、冒頭にノーベル賞のニュースを伝え、ここで初めて「2015 年のノーベル医学・生理学賞は大村智さん」という日本語字幕が使用された。「日本

時間午後 6 時半ごろ」というテロップも表示されており、2 時間半後に字幕の訳出形態が導入された。また、夜中 0 時 15 分からスタートした「NEWS WEB」では、最初にノーベル賞ニュースを伝えた。この番組では前の週にノーベル賞の予想をするコーナーがあったが、大村氏はノーマークであった旨伝えられた。

翌朝の 5 時のニュースでもトップで伝えられ以下の 2 行の字幕で伝えられた。

「2015 年の
ノーベル医学・生理学賞は大村智さん」

5 時 30 分過ぎと 7 時台にも同じニュースが伝えられ、同じ字幕が再度利用されていた。

2.2.5 4 つのケーススタディから得られた含意—字幕・同時通訳の選択と関係性

以上、4 つの重要イベントのケーススタディから、イベント発生後の時間の経過と状況に応じて、字幕の使用が選択されることが示された。ここまでに明らかになったことを、以下に整理しておきたい。

(i)まず、本稿で取り上げたサンプルに依拠する限り、字幕の使用についての明確なルールを抽出することは難しい。つまり、予想していた、「同時通訳→字幕」という直線的な関係にはなっていないことが明らかとなった。同時通訳をそのまま使用することにより臨場感や緊迫感等を出すことを目的としていると考えられる。

他方、以下の(ii),(iii),(iv),(v)のような、一定の規則性を見出すことも可能であると思われる。

(ii)重要イベントが起こった場合、映像・音声が入手できた当初の時点では、同時通訳が行われる。連続した比較的短い時間に、同じニュースの報道が繰り返される場合にも、同時通訳が利用される(例:延期後の再打ち上げの放送)。

(iii)状況が刻々と変化するような場合(例:コロンビアの事故)、新たに入手された映像音声をもとに同時通訳が行われる。

他方、(iv)状況が比較的安定的に推移し、かつ、一定の時間が経過して字幕の作成が可能になった時点になると、字幕が利用される(例:ディスカバリー打ち上げ、打ち上げの延期、ノーベル賞)。

(v)字幕と同時通訳の利用は二者択一とまではいえない。当初の放送よりも時間が経過し、状況が安定的に推移するにつれて、字幕と同時通訳を併用することも多くなる。これは、併用することで一定の効果(インパクト)を狙ったものと推察される。

図 1 ニュース翻訳の種類と流れのパターン

ニュース項目	放送時間	訳出形態		備考	
		同時通訳	日本語字幕		
(1) スペースシャトル					
①ディスカバリー打ち上げ (1998. 10. 30)	3:45～	○	—	3:45～の同通を再度利用	
	7:00～	○	—		
	10:00～	—	○		
	12:00～	—	○		
	19:00～	○	○		3:45～の同通を再度利用
②コロムビアの事故 (2003. 2. 2)	0:28	○	—	NASAの会見 大統領会見 NASAの会見と大統領会見の同通を再度利用 近隣住民のコメントには字幕 NASAの会見と大統領会見に字幕	
	3:21	○	—		
	4:05	○	—		
	5:00～	○	○		
	12:00～	—	○		
③打ち上げ延期 (2005. 7. 14)	6:03	○	—		
	7:00～	—	○		
延期後の打ち上げ (2005. 7. 26)	23:37	○	—	23:37の同通を再度利用	
翌0:00～	○	—			
(2) ノーベル賞 (2015. 10. 5)					
	18:36	○	—	18:36の同通を再度利用	
	19:00～	○	—		
	21:00～	—	○		
	翌0:15～	—	○		
	翌5:00～	—	○		
	翌5:33	—	○		翌5:00～の字幕を再度利用
	翌7:00～	—	○		翌5:00～の字幕を再度利用

凡例) ○は該当する訳出形態が用いられたことを示す。
 実線の矢印は通常の流れ、点線の矢印は表現効果を狙う場合の流れを示す。
 注1) この表では東京側で行われた訳出行為を分析した。
 注2) 主に番組開始時間を示したが、一部詳細な放送時間を記した。

3. 字幕の使用基準と字幕の作成プロセス～番組制作側からのアプローチ

本章では、番組を制作する側の視点から、どのような背景や基準により字幕という訳出形態が選択され(3.1)、どのようなプロセスで字幕が作成されていくのか(3.2)、技術的な側面にも配慮しつつ分析を行う。

分析に利用するデータを得るため、長年ニュース番組に関わってきた3名の番組制作者(A氏、B氏、C氏)に対して、それぞれ1時間程度の半構造化インタビューを実施した。インタビュー調査の実施にあたっては、研究の趣旨を説明したうえで、インタビューの書き起こしを確認してもらった。ここではインタビュー調査の分析結果に照らし、番組制作者がどのような基準や認識のもとに作業を実施しているのか見ていく。同時に、これは Chesterman (2016)のいう期待規範(expectancy norms)^{註2}を探る試みでもある。インタビューの回答には番組制作者が持っている「字幕とはどのようなものでなければならないか」に関する期待も反映されるものと考えられるからである。

3.1 字幕を選ぶ基準

字幕を選ぶ基準を考察するうえで前提の議論がある。それは「サウンドバイト」(soundbite)である。^{註3}サウンドバイトとは、一般にテレビやラジオのニュース番組などで挿入される、スピーチやインタビューからの抜粋を意味する。言い換えれば、一連の視聴覚データ(取材したデータの他にアーカイブ化された資料もある)から、番組制作のうえで重要な要素を構成するデータを情報として抽出したものである。

日本のテレビ・ニュースでは外国語話者の音声を聞かせるサウンドバイトの箇所に字幕をつけることが多い。それ以外に、海外メディアのレポートをそのままの形で使用する際は、記者の部分をボイスオーバーとし、サウンドバイト箇所に字幕をつけることもあれば、レポートを全字幕処理することもある。

テレビ・ニュースにおいてサウンドバイトは重要な意味を持つ。李(1996)は、番組制作者が「有声発言映像を使用する場合には、他の登場形式を用いる場合とは異なる意味づけがなされる」と指摘し、サウンドバイトが「他の登場形式より受け手の認知に相対的に大きな影響を与える可能性がある」と論じている。金山(2006)は外国関連ニュースで使用されるサウンドバイトの長さに関して、日本人のサウンドバイトと比較し、外国人のサウンドバイトの長さが平均して短く、その理由として、国内ソースと比較し、海外ソースへのアクセスに限りがあることをあげている。さらに、「短いゆえに一つ一つのサウンドバイトの持つ意味は重く、インパクトは強くなるとも考えられる」と指摘している。

したがって、サウンドバイト部分をどのような訳出形態で処理するのがきわめて重要となる。それでは、インタビュー対象者はどのように考え、訳出形態の選択をルール化しているのだろうか。

ここでは、以下の質問をベースにインタビューを実施した。

第1に、訳出形態の基本的な選択スタンスを質問する。

第2に、具体的な判断基準を質問する。客観的な基準が明確に確認できない場合には、基準に関係する事項をさらに質問することで、訳出形態を選択する際の基準となる考え方を導出する。

(なお、以下の記述の「」の部分は番組制作者のインタビューからの直接引用であることを示す。)

3.1.1 訳出形態の基本的な選択スタンス

映画では、すべて日本語字幕あるいは吹き替えで伝える訳出形態がみられる。他方、テレビ・ニュースの場合、目的に応じて現場で判断し、サウンドバイト部分などの訳出形態を選択している。つまり、明確な基準があつてそれに従うというよりも、当事者の主観的判断を交えつつ訳出形態が選択される。

この点をインタビューで確認したところ、「同時通訳か時差通訳かあるいは字幕というのは、僕らはその時々決めていった」(A 氏)という回答が得られた。制作者自身の判断に基づいて訳出形態を選択しているということである。

そこで次に問題となるのが、どのような考え方に基づいて判断し、訳出形態として字幕を選択するかである。

3.1.2 字幕を選択する際の基準となる考え方

まず、字幕を選択するかどうかの判断基準については、3名のインタビュー対象者から、明確なあたりで共通の「客観的な基準」を確認することはできなかった。なぜなら、選択にあたっては、制作現場や制作者個人の考え方が大きく反映するからである。

他方、判断するにあたっての関係するファクターを質問することで、訳出形態として字幕を選択する際に基準となる考え方を確認することができた。それらはおおむね2つの場合に集約できる。第1に「話者の生の声を生かすことが適切な場合」、第2に「放送時間帯により変化する視聴者層のニーズに対応する場合」である。以下、この2つの場合についてインタビュー結果を整理しつつ論じる。

a) 話者の生の声を生かすことが適切な場合

インタビューの結果、話者のもとの音声を生かすことが適切と判断した場合には、字幕を選択していることが確認できた。ただし、仔細に質問を行うと2つの選択パターンを観察することができた。

第1のパターンは、訳出対象の話者の「人格の表出との関係」から字幕を選択するものである。

原則としてボイスオーバーで処理する方針の番組であっても、特徴的な話し方の場合、あえて字幕処理することがある。例えば、海外ニュースをベースにした番組制作に携わる制作者は、ランプ氏の発言に字幕を付けるにあたり「言葉とかしゃべり方、イントネーションに、その人格が出ている場合はあえて字幕を選んで、本人の声を聴かせたい。あとは、強烈なキャラクターの人は字幕を選択する方向ですね」(B 氏)と述べている。

第2のパターンは、訳出対象の話者の「音声と話し方のもつ状況との関係」から字幕を選択するものである。

例えば、ある番組制作者は、「語調とか、声のトーンとか、言葉遣いなんかで、その国の言葉の持つ雰囲気だとか、現地感だとか、国民性とか」(A 氏)を大切に、言葉を聞かせたいという気持ちから字幕を選択していたと述べている。

また、別の制作者は「基本的に肉声を聞いてもらうというのがテレビの特性である」という点から考えていた。このため「特に英語の場合、聞いてわかるというのがありますから、なるべくなら、そこは作っている人間からしたら、本人の喋り方も聞いて欲しいなというのがありますよね」(C 氏)と述べている。英語音声を活かすという観点から字幕を選択していることが確認されたといえよう。

b) 放送時間帯により変化する視聴者層のニーズに対応する場合

インタビューの結果、番組制作者が、放送時間帯によって変化する視聴者層を意識して訳出形態を選ぶ傾向も確認された。

例えば、ある制作者は、「外国の方へのインタビューなどで、字幕で音を聞かせようというケースは多いのですが、ちょっと長くなると、朝の忙しい時間帯にじっと聞いてもらうのは、難しいため、吹き替えにしたりしていますね。それぞれのニーズに応じて変えているということですかね」(C 氏)と視聴者の生活リズムや状況を考慮している点が観察された。

また、深夜に放送される報道番組の制作者は、当初はキャスターやリポーター部分を含め、すべてに字幕をつける「全スーパー」で対応していた。他方で、視聴者層を意識し訳出形態を変更したこともあった。夜遅い時間帯に、お茶の間でのんびりと視聴するときなど、字幕をひたすら追うのは大変だろうという配慮から、「緩急をつける意味」(A 氏)で、字幕やボイスオーバーを交互に使用するようになったという。

他方、以上のような視聴時間帯に応じた対応とは別に、最近では字幕あるいはボイスオーバーのどちらか一方を使用するのではなく、両者を「併用」する場合がみられるようになっていく。

このような併用型の普及状況について、ある番組制作者に確認したところ、訳出が必要な部分を「視覚チャンネルと音声チャンネル両方で情報を伝えていく。それが今のトレンド」(B 氏)と述べている。通常のニュース番組においても、視聴者が理解しやすいように海外ニュースを伝えるというニーズに応えるため、併用型が多用されつつある様子が窺われた。

3.2 字幕付き映像の作成過程

本節では、まず外国語のニュース映像・音声を実際の放送番組で字幕付きで放映するまでのプロセスについて、主体との関係を描き出しつつ作業工程を明らかにする(3.2.1)。その後、プロセスを構成する各作業工程の具体像や重要な要素について分析する(3.2.2)。さらに、技術開発が字幕作成に及ぼす影響に論及する(3.2.3)。

翻訳に関係する個々の行為や関係主体の関わり方について、Gambier (2006)は、ニュース翻訳の「ゲートキーパーの役割」、「操作」、ニュース翻訳特有ともされる翻訳と編集を兼ね備える「トランスエディティング」などに注目した。また、Vuorinen (1995)は、ニュース翻訳におけるゲートキーピング行為とは削除、付加、補足、改変であると論じている。また、Bielsa & Bassnett (2009)は、通信

社で行われるニュース翻訳は、ジャーナリストがニュース制作の一環として行う場合が多いと指摘しつつ、翻訳者が自ら翻訳する内容を選択し、翻訳テキストに関しても責任を持つ状況がみられるようになってきたと論じている。

すなわち、翻訳に関係する行為の捉え方は多様であり、ニュース翻訳に関わる翻訳者の役割もまた多様でありうる。したがって、以下に述べる字幕付き映像の作成プロセスは、インタビュー結果から明示的に確認できたものに限っていることに留意されたい。

3.2.1 字幕付き映像の作成プロセス

字幕付き映像の作成プロセスは、英語ニュースの番組全体を扱う場合や、特定のサウンドバイト箇所のみを利用する場合など、取り上げる対象に応じてさまざまである。そこで、本項では、さまざまな制作プロセスのバリエーションがあるなかで、おおむね共通の部分を抽出して、個別作業工程と全体のプロセスを俯瞰することを試みる。

第 1 に、「ゲートキーピング」の工程がある。ゲートキーピングとは、入手した視聴覚映像から、放送の対象を選択する段階である。ゲートキーピングの主体は番組制作者であり、具体的な作業は番組の担当ディレクターが行うのが一般的である。

第 2 に、「全訳」作業の工程である。主体は、映像翻訳者である。ここでの翻訳作業は、ディレクターの指示に沿って、一定程度の幅をもちつつも、字幕の作成で使用する映像音声部分に対して、起点言語の内容を省略することなく基本的に全て翻訳する。

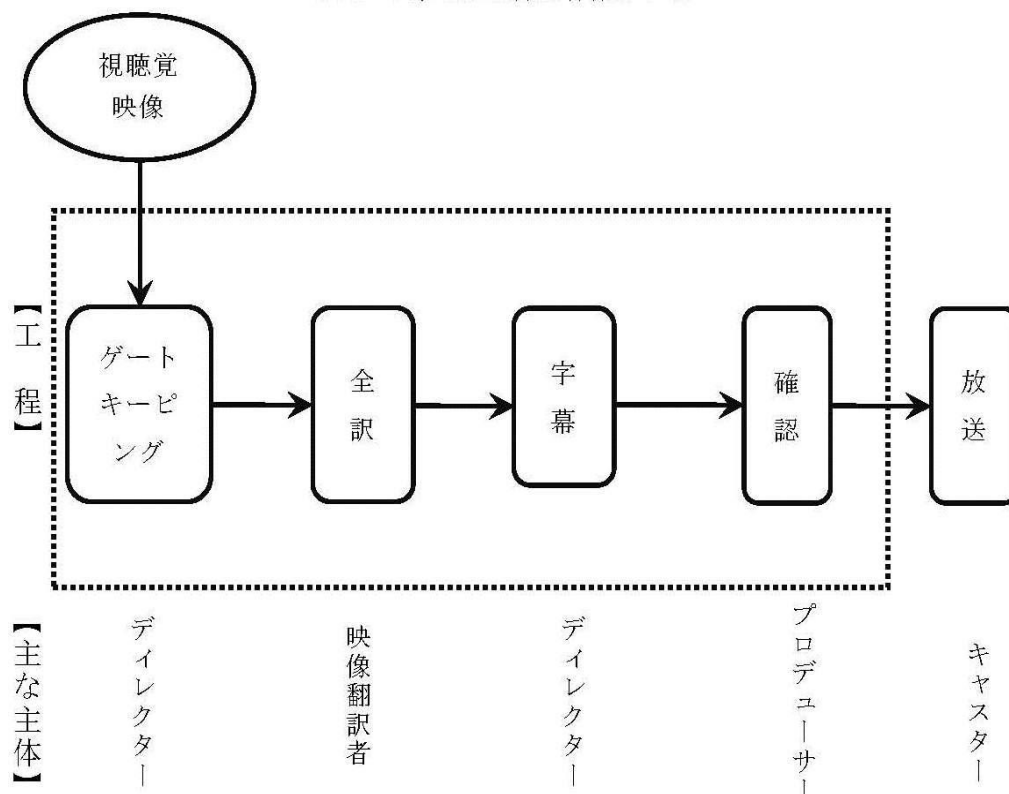
第 3 に、「字幕作成」の工程である。この工程では、全訳されたものから、実際の放送で使用する箇所を選択し編集を加え字幕を作成する。この工程の主体は、一般的には番組制作者のうちの担当ディレクターである。

第 4 に、「確認」工程である。後述するように、番組制作者のうちプロデューサーのような責任主体が行うケースが多い。

以上の作業を経て放送に付されることになる。放送においても、後述するように、字幕情報に対して「キャスターによる補足」という意味を付加する工程が追加されることがある。

以上を図示すると以下のようなだろう。今回のインタビュー結果から確認された作成工程は図 2 の点線で囲まれた部分である。なお、報道番組の担当者がゲートキーピングから字幕作成まで作業を行う場合や映像翻訳者が字幕を作成する場合などもある。

図 2 字幕付き映像の作成プロセス



以下、個別作業工程の具体的側面や重要な要素について、作成プロセスに沿って論じる。

3.2.2 個別作業工程の具体像と重要な要素

a) ゲートキーピング

日本の放送局で使用コンテンツを決めるゲートキーピングの役割を果たしているのは主に番組制作者、なかでも担当ディレクターである。ディレクターは必要に応じ、外国語のニュース・コンテンツに関する説明を通訳者や翻訳者から受けた上で使用素材を決めている。そのようなプロセスで選ばれた翻訳素材が字幕になる。したがって、ゲートキーピングの主たる行為者はディレクターであるものの、映像翻訳者等もその一部を構成する場合がある。

b) 全訳

翻訳の工程においては、主な主体は映像翻訳者である。ディレクターや記者経験などがある番組制作者へのインタビューの結果、映像翻訳者に対し「指示されたことのみに取り組むのではなく、番組制作者が何を求めているのかを意識しながら、臨機応変に訳出にあたってもらいたい」と考えていることが明らかとなった。すなわち、番組制作者は、映像翻訳者に一定の裁量を認めていることになる。

ちなみに台湾のテレビ局で翻訳業務に携わり、現場の実情を分析した Tsai(2005)は、映像翻訳者に一定の「裁量」が与えられている状況を指摘している。ただし、裁量を認められる翻訳者が手掛けた翻訳が、そのまま放送で使用されるわけではない。台湾のテレビ局では、ディレクターが高い品質を担保するために、翻訳完成後に翻訳原稿に対して校正・検討・修正を行っている。Tsai はディレクターが重要な役割を果たしていると論じている。つまり、翻訳工程において、主たる行為者は映像翻訳者であるとしても、この工程にはディレクターも関与している点に留意を要する。

c) 字幕作成

まず、ニュース番組の字幕を作成するのは、主に国内の番組制作者である。

他方、インタビューの結果、海外で記者が取材をおこない、日本へ素材となる取材結果を送る場合があることが指摘された。このような場合、現地の記者が字幕案を作成することもある。しかしながら、こうしたケースにおいても、ニュースの全体の流れの中で、日本の番組制作側が字幕をまとめるという。

続いて、インタビューでは、字幕作成に関する特筆すべき要素について質問した。そこで挙げられたのは、字幕作成のルールである。具体的には 2 点あり、第 1 に文字数の取り扱い、第 2 に単位表記の方法である。

c1) 文字数の取り扱い

インタビューの結果、まず、文字数に関しては共通のルールがないとのことであった。次に、字幕に関しては簡潔にまとめる必要があるという。放送現場では、「極力短くするよう」に常に言われており、「読めなければ、何も伝わらない。字幕が出ていないようなものだから」という回答がみられた。

さらに、字幕作成にあたっての画面ごとの文字数について質問した。インタビュー対象者 3 名の回答は以下のとおりである。

ある回答者は、最大 2 行で画面に表示する字幕作成の対象として取り出す映像の長さが「7～8 秒に対して、1 行 15 文字程度、(2 行の合計)30 文字程度」であるが、この基準は 20 年ほど前の古いデータであり、現在は時間あたり文字数はもっと少ないであろうとする。一方で、「8～10 秒に対して、1 行 9 文字程度、(2 行の合計)18 文字程度」とした回答者や、「15 秒くらいをめどに、一行 15 文字程度、(2 行の合計)30 文字程度以内」で作成するという回答者もいた。回答者の回答には幅がみられる。

以上のデータを表に整理すると以下の表 1 のようになる。

表1 字幕作成における文字数の取り扱い

	映像の長さ a	1 行あたり 文字数	合計文字数 b	単位文字数 b/a
パターン A	7-8 秒	15 文字程度	30 文字程度	3.8-4.3 字/秒
パターン B	8-10 秒	9 文字程度	18 文字程度	1.8-2.3 字/秒
パターン C	15 秒程度	15 文字以内	30 文字以内	2.0 字/秒

(注) パターン A については、現在のデータが不明のため、先方があげた以前のデータを使用。単位文字数とは、1 秒あたりの字幕文字数であり、単位時間あたりの情報量を示す。回答は「程度」であったため、単純に除した単位文字数は参考値。

c2) 単位表記の方法

インタビューの結果、通貨や温度、長さ、重量などの単位表記を統一する立場と、明確な基準を設けない立場におおむね二分された。

まず、単位表記を日本国内の単位に統一する立場は、「円換算を含め、字幕では全て日本で使用する単位に計算し、表示している」と回答した。このほか、「猛暑のニュースを訳出する場合、華氏 100° と出た場合、視聴者はそう簡単に換算できないので、やはり、日本になじみのあるセ氏に換算し、37.8° と伝えた方がわかりやすいのではないか」という指摘は、統一する側に与するものである。

これに対して、単位表記について明確な基準を設けない立場からは、「フィートで言ったほうが雰囲気が出る場合はフィートと表現し日本の単位に換算しないとしたり、あるいは「余裕がある場合、字幕にポンド(グラム)と併記することもあった」という指摘があった。「その日の番組の担当デスクの判断によって見解が異なったり、あるいはコンテンツにもっともふさわしい換算をしたりすることもある」という。

d) 番組責任者による確認

インタビューの結果、正確性を確保するために、作成された字幕に対する確認工程が存在し、重要な機能を有していることが明らかになった。

すなわち、b) で述べた台湾のテレビ局の事例と同様に、日本でも、番組制作者あるいは翻訳者が作成した字幕は、事前にディレクターや番組全体の責任を担うプロデューサーなど複数の番組制作者によって確認されている。

具体的には、「最終的なチェックはプロデューサーが行う」とする回答、「翻訳原稿に基づき、ディレクターが作成した字幕を、デスクの次にプロデューサーが確認した上で放送に使用」との回答、あるいは、「基本的にはディレクターが素案を作り、それを番組の責任者が確認する」とする回答が得られた。ディレクターから番組内容を決めるデスクなどを経由し、番組責任者が確認している

ことが明らかになった。インタビュー回答者の全てが、字幕作成後のチェック体制の存在を肯定している。

基本的にはプロデューサーが、責任主体として字幕の確認作業を行っている。

e) 放送

インタビューの結果、放送段階に入ってからでも、キャスターがついている番組では、キャスターによる補足という工程が付加される場合があることが確認された。

例えば、海外放送メディアのレポートを扱う番組では、以下のように補足が行われることがある。第1に、日本人キャスターがレポートの視聴ポイントを紹介する。第2に、ボイスオーバーと字幕を併用したレポートを流す。第3に、レポートだけでは視聴者が理解することは難しいと判断される場合には、レポートを受けて、日本人のキャスターが補足する。このように第3の段階で、補足説明を行う方法もとられているとのことであった。補足説明には、キャスターがレポートの中に出てくる用語解説などを行う場合もある。

3.2.3 技術開発が字幕作成に与える影響

最近では、映像翻訳も劇的な技術の変化の波にさらされている。インタビューの結果、技術開発が字幕作成に与える影響の大きさが確認された。以下、周辺情報も加味しつつ3名のインタビューを総合し、3.2.1で整理した字幕付き映像の作成プロセスに沿って記述する。

まず第1にゲートキーピング工程である。技術的な制約から、一日に一回、海外から送られてくる映像素材を使用していた時代には、「映像が出るニュースというのは本当に短かった」ため、字幕を入れることは少なかった。また、かつては衛星回線を通じて映像を海外から送っていたが、コストがかさむため、放送で使用可能な部分をあらかじめ海外で厳選して日本に送っていた。

つまり、技術面とコスト面の制約から字幕の利用が少なかったことがわかる。

第2に、全訳工程である。映像翻訳者の業務スタイルも変化している。大量の映像を翻訳する際、かつては翻訳者がテレビ局に赴くかあるいは自宅に送られてきたビデオを翻訳していた。今ではインターネット経由で受け取った動画ファイルを自宅で受信し、翻訳原稿のデータをそのまま送信することが可能になってきたという。

第3に、字幕作成工程である。廣谷(2014)によると、番組タイトルや放送中に表示される文字であるテロップはテレビ局が開局した当時はすべて手書きであり、その後、写植機を経て、現在のコンピューターによる制作へと技術的な変遷を遂げてきた。今回のインタビューで、テロップを作成する時間とコストの削減によって、報道番組で日本語字幕を多用することが可能になったという回答が得られた。

第4に、番組制作者による確認工程である。テレビ朝日では、テロップ・システムのANTS(Advanced Network Telop System)を開発している。このシステムは、番組担当者や記者がテロップを発注し、ニュースCG室でテロップを制作し、最後にサブ(副調整室)で操作し、テレビ画面に乗せる方式をとる。作成過程では、誤字や脱字の有無について多層的に確認がおこなわれている。

以上を整理すれば、技術開発によって、技術面・コスト面から字幕の利用が拡大する(量的拡大)とともに、映像翻訳者の業務スタイルが柔軟になり、確認工程も充実している様子が見られる(質の充実)。字幕作成の量的拡大と質の充実の両面に、技術開発が貢献してきたといえよう。

4. 結語

本研究では、Valdeón (2015)と Holland (2013)の提唱したアプローチを複合的に捉え、報道機関の番組制作者が依拠する字幕を選択する基準、ならびに、字幕作成に関与する主体と過程を明らかにすることを試みた。

その結果、以下のような結果が得られた。

第1に、重要な科学イベント発生後の、一定程度連続した時間的範囲内における字幕と同時通訳の使い分けとその関係性について、過去の放送記録をもとに分析したが、字幕使用の統一的基準の抽出はできなかった。

しかしながら、一定の規則性を見出すことはできた。すなわち、重要イベント発生直後や、状況にあまり進展がない中で報道が繰り返される時は過去の同時通訳の映像音声を利用される。状況が変化する場合、新しい映像音声をもとに同時通訳が行われる。他方、状況が比較的安定し、一定の時間が経過すると字幕が利用される。字幕と同時通訳は、一定の効果を狙った場合には併用もありえる。

第2に、番組制作側の考え方をとらえるために、字幕の使用基準と作成プロセスについて、技術的な側面も視野に入れつつ、ニュース番組制作者3名にインタビューを実施し検討した。

その結果、まず、字幕を選択する客観的な基準については確認できなかった。しかしながら、基本的な考え方については、話者の生の声を生かすことが適当な場合と、放送時間帯により変化する視聴者層のニーズに応えられると判断される場合に、字幕を選択することが明らかになった。制作側の期待規範に関しては、「臨機応変に」、「(視聴者が)読めるように」、「極力短く」という言及はあったが、字幕翻訳の内容まで踏み込んだ期待規範は明確にはならなかった。

次に、字幕付き映像の作成プロセスに関しては、ゲートキーピングから、仕上がった字幕の確認に至る一連の作業工程を抽出することができた。そのうえで、複数のアクターが関与する各作業工程の特徴や内容を明らかにした。さらに、技術開発が、字幕作成の量的拡大と質の充実に貢献していることも明らかになった。

最後に、本研究の限界と課題は以下のとおりである。

まず、字幕の選択や作業工程については多様でありうる。本稿の研究結果は、あくまでも取り上げた事例ならびに実施したインタビューをもとに導くことができたものであり、結果を一般化できるものではない。したがって、事例の積み重ねによる研究の深化が必要である。

また、技術開発は著しいスピードで進んでいる。Cronin(2013)が取り上げた、ウェブ・ベースの機械翻訳サービスを使用した翻訳プロセスの台頭や、BBCが2015年12月から試験運用を始めた動画ニュースにボイスオーバーをつける「バーチャル・ボイスオーバー・トランスレーション(仮想翻

訳吹き替え)」などは、翻訳者の伝統的なステータスに変化を与えるものと予想される。引き続き、技術的な動向と字幕作成との関係について注視していくことが求められるだろう。

以上は、筆者の取り組むべき今後の課題としたい。

【謝辞】

本研究をすすめるにあたり、ニュース番組制作者の皆様にはインタビューに応じていただきました。また本稿の一部でNHK アーカイブス学術利用トライアル研究Ⅱの際、得られたデータを使用させていただきました。本研究へのご理解とご協力に感謝いたします。

【著者紹介】

稲生衣代 (INO Kinuyo) 青山学院大学文学部准教授。専門は放送ジャーナリズムにおける通訳翻訳、映像翻訳、通訳教育。

【註】

- 1) 本稿で扱う「テロップ」は速報ニュースや曲名など画面表示される文字を指し、「字幕 (subtitle)」もテロップの一種であると考える。
- 2) 期待規範とは目標言語の読者が持っている、翻訳に対する期待から作られたものであり、放送局の番組制作者もまた期待規範を持っていると考えることができる。
- 3) なお2章ではサウンドバイトについては取り上げなかったが、これは2章が同時通訳と字幕の使用に関する時系列分析が中心であり、言及する必要がなかったためである。

【参考文献】

- Bielsa, E., & Bassnett, S. (2009). *Translation in Global News*. London/ New York: Routledge.
- Cheesman, T., Nohl, A. M., & BBC WS US Elections Study Group. (2011). Many voices, one BBC World Service? The 2008 US elections, gatekeeping and trans-editing. *Journalism*, 12(2), 217-233.
- Chesterman, A. (2016). *Memes of Translation. Revised Edition.*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Cronin, M. (2013). *Translation in the Digital Age*. London/ New York: Routledge.
- Diaz-Cintas, J. D., & Orero, P. (2010). Voiceover and dubbing. In Y. Gambier & L. van Doorslaer (Eds.), *Handbook of Translation Studies*. (Vol. 1, pp. 441–452). Amsterdam: John Benjamins.
- Gambier, Y. (2006). Transformations in international news. In K. Conway & S. Bassnett (Eds.), *Translation in Global News – Proceedings of the Conference Held at the University of*

- Warwick – 23 June 2006. (pp. 9–21). Coventry: University of Warwick, Centre for Translation and Comparative Cultural Studies.
- Gottlieb, H. (2004). Language-political implications of subtitling. In P. Orero (Ed.), *Topics in Audiovisual Translation*. (pp.83-100). Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Hatim, B., & Mason, I. (1997). *Translator as Communicator*. London/ New York: Routledge.
- Holland, R. (2013). News translation. In C. Millán-Varela & F. Bartrina (Eds.), *The Routledge Handbook of Translation Studies*. (pp.332–346). London/ New York: Routledge.
- Karamitroglou, F. (2000). *Towards a Methodology for the Investigation of Norms in Audiovisual Translation*. Amsterdam/ Atlanta: Rodopi.
- Pedersen, J. (2011). *Subtitling Norms for Television*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Tsai, C. (2005). Inside the television newsroom: An insider's view of international news translation in Taiwan. *Language and Intercultural Communication*, 5(2), 145-153.
- Valdeón, R. A. (2015). Fifteen years of journalistic translation research and more. *Perspectives*, 23(4), 634-662.
- Vuorinen, E. (1995). News translation as gatekeeping. In: M.Snell-Hornby, Z. Jettmarov & K. Kaindl (Eds.), *Translation as Intercultural Communication*. (pp. 161-171). Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- 廣谷鏡子 (2014) 「放送のオーラル・ヒストリー 「テレビ美術」 の成立と変容:(1) 文字のデザイン」『放送研究と調査』 64(1), 58-75.
- 稲生衣代 (2013) 「スペースシャトル報道の同時通訳」.『青山学院大学文学部紀要』 55, 69-91.
- 金山智子 (2006) 「外国人にみる声の多様性: 外国関連ニュースにおけるサウンドバイトの意味」『メディア・コミュニケーション: 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』 56, 129-141.
- 李光鎬 (1996) 「日本の TV ニュースにおけるニュース・ソースの分布: NHK と民放の比較を中心として」『マス・コミュニケーション研究』 49, 82-95.
- 七沢潔・東野真 (2009) 「調査研究ノート:「テレビ制作者研究」 の方法と方向: ディレクター・片島紀男の場合」『放送研究と調査』 59(8), 74-89.
- テレビ朝日「テロップシステム“ANTS”紹介」<https://saiyo.tv-asahi.co.jp/2017/contents/work/art/blog/index3.html> (2016年1月6日取得)